

## トマス・アキナス『神学大全』の残照を受けて

荒井, 洋一  
東京学芸大学 : 教授

<https://doi.org/10.15017/1564236>

---

出版情報 : 哲学論文集. 50, pp.141-158, 2014-12-26. 九州大学哲学会  
バージョン :  
権利関係 :

# トマス・アクィナス 『神学大全』の残照を受けて

荒井洋一

## 第一章 トマス・アクィナス研究会

- (i) 今、中世哲学を研究する意義は、と深くみずからに問いかけつつ、まずは大変に小さな研究会について紹介したい。
- (ii) 私は、昨年、大変に小さなアウグスティヌス研究会から出している *Vestigia Cordis* III、二〇一三年の巻頭言に、「隣の研究会」と題して、同じく、大変に小さなトマス・アクィナス研究会の紹介をしている。

また、アウグスティヌス研究会の指導者・加藤武先生の御依頼を受けて、同誌に、稲垣良典先生の玉稿「『神学大全』を読み始めた頃」を御寄稿いただいてもいる。

「隣の研究会」と題したのはなぜかという点、当時のアウグスティヌス研究会の場である立教大学から、空間的には大いに隔たっているが、私の心の中では、すぐ近くの「隣」に位置する、九州は福岡県宗像市の稲垣良典先生宅で、毎月一度開かれているトマス・アクィナス研究会について、ぜひ広く知っていただきたいとの願いからのことである。

一九九二年の四月二五日が第一回目のトマス研究会なので、今年で、二二年目になる。

私の専門の範囲内では知らないが、東京では、加藤信朗先生の Monday Seminar や加藤武先生のアウグスティヌス研究会——現在は水落健治先生に代表者が交代している——が息の長い研究会として今日まで継続している。

それらに比べても、稲垣先生の主宰するトマス研究会は、けっして引けを取らぬくらいに長続きしている。日本でも有数の、息の長い研究会と言えよう。

トマス研究会の歴史や実際について、九州大学哲学会の皆様のうち、中世哲学をご専門とする先生方には、比較的よく知られているであろうから、*Vestigia Cordis III* に記したことを改めて再言する必要はほとんどないであろう。

けれども、古代かまたは近現代をご専門とする先生方に対しては、ぜひその一端だけでも知っていただきたく、少しアレンジした上で、ごく一部のみ再言して、ご紹介してみよう。

トマス研究会の発足当初は、『神学大全』第一部第八五問題第一項から読み始めたが、その後、もっぱら第二部を読み進めている。

たとえば、私が東京から参加した或る日は第二一〇問題第二項であった。前回担当の東谷孝一先生の後を受けて、堺正憲先生の担当で、正確な翻訳と詳細な解釈が示された。第二一〇問題のテーマは「神の恩寵について——その *essentia* に関して」である。

「神の恩寵について——その *essentia* に関して」とは、いかにも、現代離れをしたテーマであると思われるかもしれない。これでは、忙しい現代人から見ると、前代の遺物としか思われな、と。この研究会は、遠くからは、陳列している品々のすべてが古色蒼然としている骨董品店にも見まがうほどである、と。

思うに、哲学の存在意義が問われる現代にあって、中世哲学の存在意義こそはもっとも徹底的に問われてしかるべきであろう。

ただ、ここで、「テキストの読解だけに終始してはならない」との『哲学論文集』編集委員会の禁止事項を胸に刻みつつ、一切の註釈を差し控えて、雰囲気だけを伝える。

この *essentia* の意味について、金子隆徳先生の「伝統的には本質と訳されるが、ここでは存在の意味あいが強い」との問題提起を受けて、私が「では存在性と訳してどうか」と提案してみると、出席者から反対意見や賛成意見が表明され、議論が白熱し、沸騰してくる。そのようなさなかにおいても、稲垣先生が静かに発言されると、紛糾し、錯綜する論争の中に一定の方向付けがなされるのが常である。

その言葉に耳を傾けていると、一言一言に含蓄があり、多年にわたり、雨の日も風も日も営々と続けてきた、膨大で、綿密な研究に裏付けられているため、聞けば聞くほど奥が深く、しだいに、まるで自分の中の暗闇がまばゆい光に照らされているかのように思われてくるのである。

けれども、もしかして、それは、私が九州大学大学院に入学以来、今日に至るまで、あまりにも長年にわたり稲垣先生のご指導を受けてきたゆえの幻想ないし偶像化ではないかと疑ったこともある。

二〇一四年七月一九日、慶應義塾大学において、山内志朗先生の肝煎りにて、稲垣先生の御著書『トマス・アクィナス「存在」の形而上学』春秋社、二〇一三年をめぐる言語文化研究所公募研究公開シンポジウム「トマス・アクィナスと〈存在〉の哲学」が開かれた。

コメンテーターとして、加藤和哉先生、上枝美典先生、川添信介先生、片山寛先生など、第一級のトマス研究者が名を連ねていたし、フロアにも山本芳久先生がいて、それぞれに鋭い批判を展開したが、稲垣先生は堂々として少しも動じることなく、彼らの批判をやりわりと受け止めた上で、おもしろい冗談や過去の回想まで交えつつ解答し、段違いのスケールの大きさを示してくれた。

(iii) ここで、また、右の現代人からの批判に帰る。

「神」や「恩寵」に関心を持たない大多数の先生方においては、中世哲学研究は何の役に立つのか、と批判されるだろう。それゆえ、以下には、一般に拒否反応を引き起こすことの多い恩寵論の分野ではなく、いわば一定の「市民権」を今も得ている情念論の分野において、中世哲学研究の持つ現代的な意義を語りたいと思う。

トマスの情念論は、トマス研究会において、かつて、稲垣先生のご承認の下、共同研究の可能性が模索されたことがあるくらい、今でも、少しだけアレンジすれば、直接、現代人の心に生き生きと響くことのできる力を保持している分野である。

## 第二章 現代から近代へ

(i) 右に記した稲垣先生の玉稿「『神学大全』を読み始めた頃」には、かつて、東京大学に提出した卒業論文「トーマス・アクィナスの主知主義」の口頭試問の際に、当時の岩崎武雄助教教授により「トマスの存在論に現代的な意義があるとは思わない」とずばりと切り出されたことが想起されている。

もしかして今日でも、このような批判が近現代の哲学研究者の間で存続しているとしたら、いくら、私が、ここで、『神学大全』の全訳完成を讃えたとしても、空虚に響くであろう。

そこで、なんとか、私なりに、「現代的な意義」を探してみよう。

(ii) その前に、まずは事実経過を素描してみる。

二〇一二年秋に、トマス・アクィナスの『神学大全』創文社の日本語訳がついに完結したことは、我が国の中世哲学研究史上、歴史に残る、まさに偉業であった。

一九六〇年の第一分冊刊行以来、なんと五二年にも及ぶ、気の速くなるくらい長きにわたる気宇壮大な仕事である。

事務書類がなぜかしら日々、増加の一途をたどるため、それだけでも十分、目がまわるくらいに忙しいのに、いわゆる

missionに照らして、あまりにも短期に成果やevidenceが求められる現代では、とてもとても考えられないくらい悠然として、超長期にわたる大仕事であると言えよう。

この点に関しては「現代離れ」や「時代遅れ」は良いことである。

中世哲学会から出している『中世思想研究』第五五号、二〇一三年には、訳者を代表して、稲垣良典先生が、他の訳者の大森正樹先生や松根伸治先生と共に寄稿しているし、中世哲学会会長の八巻和彦先生や、九州大学哲学会会員の片山寛先生も、この偉業を讃える文章を寄せている。

トマス・アクィナスの『神学大全』の日本語訳は、全一六人の翻訳者たちが担当した。

全翻訳のうち、稲垣良典先生は約半分を担当した。

今日から見ると、歴史に残る記念碑的な、巨大な仕事であり、まさに偉業であるが、当初は「なぜこんな労多くして功の少ない仕事に精を出すのか」と言われたと私は聞いている。

けれども、そのような雑音に耳を貸すことなく、倦まず、たゆまず、毎朝、稲垣先生は翻訳の仕事が続けた。稲垣先生によると、「バッハやモーツァルトを聞くようにして」。

「なぜこんな労多くして功の少ない仕事に精を出すのか」と当初、好意から忠告してくれた中世哲学会の会員も、稲垣先生の翻訳が営々として続けられ、稲垣先生訳の『神学大全』が陸続として出版を重ねるうちに、途中で気づいたであろう。これは偉大な仕事であり、だれにも容易に真似のできない仕事である、と。

苦勞の多い『神学大全』の翻訳に従事するよりも、論文や本の執筆に精を出していた方がよほどましであると当初、考え、助言してくれていた研究者たちの目にも、年を追うごとに積み上げられていき、ついには、「ちりも積もれば山となる」、いや、とんでもない、一枚一枚に丹精をこめた、万年筆による「手書きの翻訳原稿も積もれば宝の山となる」とのことわざがあるかのように、まるで富士山かと思まがうほど、見上げるべき高さにまで達した『神学大全』の翻訳の営為が、驚嘆と敬

意の念と共に、仰ぎ見られたはずである。

最大の危機は一九九三年三月三〇日に訪れた。

『神学大全』第九分冊を最後に、第一分冊以来の日本語訳の営みが途切れてしまいか否かの重大な切所に臨んで、その日の正午から三時までの間、高田三郎邸で開かれた、いわば御前会議、すなわち、高田三郎先生を座長とし、高田門下の有力な翻訳者たちの他に、創文社社長や編集者までもが出席する会議において、稲垣先生は大きな役割をはたしたが、その際、高田三郎邸に前日から宿泊させていただき、かつまた第九分冊の訳稿も見せていただく際に、高田三郎先生のご長男夫人の高田和子さんは助けてくださった恩人と聞いている。

この最大の危機を乗り越えて、『神学大全』の訳業は以後、順調に続き、ついに完成した。

稲垣先生は訳者を代表して、出版社の創文社と共に、第六七回毎日出版文化賞を授与された。

二〇一三年一月二六日、椿山荘にて授賞式があり、私も出席することができた。

その場には、中世哲学会会長の八巻和彦先生と共に、高田和子さんも招かれていた。

(iii) 次に『神学大全』の読み方について記してみる。

稲垣先生はトマス研究の第一人者として、きわめて高度な視点から、「全体を一つのまとまりのある「語り」として読むことが必要」とする（『トマス・アキィナス』『神学大全』講談社、二〇〇九年）。

私は長崎純心大学の稲垣研究室を訪れたことがある。

長崎駅からバスに乗り、曲がりくねった山道を約三五分ほどかかって、ようやくたどりつくくと、恵みの丘の山上に立つ大  
学が現われてくる。

研究棟の研究室は、廊下を隔てて、山側と海側に分かれる。

山側の研究室からは間近に迫る山肌しか見えない。

最上階の稲垣研究室は海側にあり、そこからは大村湾をはるかに見晴るかすことができた。

これはもちろん比喩である。

私はけっしてトマス研究の専門家ではないので、私の読み方はいわば素人的であり、百科全書的に読むことである。

比喩的に言うと、私はけっして『神学大全』を一望の下に見はるかす高い視点からテキストを見ているのではなく、曲がりくねった迂路をたどり、テキストの岨道になんとかへばりつきつつ、出現するさまざまな個別の問題と格闘しながら、頂上を目指している一人の旅人にすぎない。

読売新聞（二〇一二年一月七日）で慶應義塾大学教授・山内志朗先生が言う。現代人にとり、情念論が近づきやすい、と。

私も同感であり、トマス研究会では、一時、情念論の共同研究の可能性を検討したことがあるのは右に記したとおりである。

ただ単に近づきやすいだけではなく、現代人が、暗黙のうちに、当然のこととしている「真実」を相対化してくれるメリットがある。

ここでは、現代人を苦しめることの多い情念のうちの一つである「嫉妬」に焦点を合わせて具体的に論じてみる。

(iv) 一体、「嫉妬」とは何か。

また「嫉妬」と「愛」との関係はいかに。

一般に、現代人は「愛するがゆえに、嫉妬する」と考えていないだろうか。

その「愛」がいかなる愛かをあまり考えることなく。

ところが、意外にも、『神学大全』は大いに教えてくれるのである。第二一一部第二八問題第四項、また第二一二部第三二六問題などで。



こう言うと、きつと現代人は反論するであろう。「何も中世哲学者に教えてもらう必要はない。彼らは皆、一樣に現代離れをしているので、ピントはずれでもあろう。現代は、中世に比べて、はるかに高度で複雑な時代なので、同じ現代の哲学者や哲学研究者から教えてもらうのにしくはない」と。

(v) この反論に反論するために、まず、現代の哲学の研究論文を瞥見してみよう。

Daniel M. Parrell, "Jealousy", *The Philosophical Review*, LXXXIX, No. 4, 1980.

この論文を読むと、現代英語の jealousy は、ほぼ、現代日本語の「嫉妬」の意味として用いられていると言える。

命名された jealousy の二分類とは、sexual jealousy と professional jealousy であるが、これも「嫉妬」の意味の広がりによって、重なり合うと言うことができる。すなわち、日本語の「嫉妬」も男女関係において語られていると言えるし、また、優劣関係においても語られていると言える。

ファレルは、アメリカの哲学の流儀に従い、「ジェラシーとは何であるのか」を言おうとするわけではなく、「ジェラシーとは何でないのか」を厳密に分析し、浮かび上がらせる。すなわち、世の中に流通しているジェラシーについてのさまざまな通念や通説の批判を通して、「あのような説明方式も間違いである」、「このような説明方式も間違いである」と主張する。たとえば、ジェラシーは「所有欲」との関係で説明されることが多い。一般に、所有欲の強い人は嫉妬深い人である、というように。

ファレルによると、その説明は間違いである。

確かに、「私は愛する人を盗られた」という言い方は流通しているし、もっと暴力的に、「私は愛する人を強奪された」という言い方まである。まるで、私の所有物が盗られたり、強奪されたりするかのよう。

けれども、もっと事実即して、正確に考察するなら、「私」の「愛する人」は、けっして、「私」が所有する「物」、すなわち thing、または object ではなく、chooser である。すなわち、「私」よりも「彼」を選んだ人 (person) であることがわか

る。

したがって、ジェラシーは「所有欲」との関係から説明されることができない。

ジェラシーは、最後に、どのような説明方式によっても説明できない「奇妙な情念」として残されることになる。

(vi) けれども、私たちは、本来、「ジェラシーとは何でないのか」を知りたいと願うのではなく、「ジェラシーとは何であるのか」を知りたいと願うのではないだろうか。

そこで時代をさかのぼって、現代から近代へと向う。

デカルトの『情念論』では、*jalousie* は、数種類の日本語訳では、けっして「嫉妬」とは訳されずに、「執心」、ないし「執着」などと訳されている。

その意味は「今持っている善いものをいつまでも持ちつづけようとする欲望に関連する一種の恐れ」（『情念論』一六七）である。

*jalousie* の使用領域はデカルトにより四区分されている。

そのうち、第一区分と第二区分は「公正な情念としての *jalousie*」である。

第三区分と第四区分は「とがめられるべき情念としての *jalousie*」である。

そして、第四区分が「嫉妬」としての *jalousie* にあたる。

つまり、デカルトにおいては、「嫉妬」としての *jalousie* は、すべて、とがめられるべき情念である、とされている。これは、ダニエル・ファレルにおいてはまったく抜け落ちていて、実に意外な視点である。

(vii) それはなぜか。

それは、一言で言うところ、デカルトが、よく言われることであるが、トマスに代表されるスコラ哲学の情念論を表面上は手厳しく批判しながら、実際には、かなりの部分、その遺産に立脚しているからであろう。

トマスにおいては、「ねたみと結びついた熱望」*zelus invidiae*が「嫉妬」に当たる(第二一部第二八問題第四項主文)と考えられる。

そして、「ねたみ」は、トマスによれば、「主要な悪徳、根源的な悪徳」であり(第二一部第三六問題第四項主文)、「大きな罪」である(第二一部第三六問題第三項主文)。

デカルトが、いわば当然のこととして、「嫉妬」としての*jalousie*を「とがめられるべき情念としての*jalousie*」に分類しているのは、このような、トマスに代表されるスコラ哲学の情念論に立脚しているからと言えよう。

この点については後で詳論する。

(iii) もしも、デカルトにおいて、「嫉妬」としての*jalousie*は、すべて、とがめられるべき情念であるとする、「嫉妬」と愛とはどのように関係づけられているのであろうか。

現代人は「愛するがゆえに、嫉妬する」と考えているし、「嫉妬は愛の証拠」とも考えていると思うが、その「愛」は一体いかなる愛であらうか。

デカルトは、「嫉妬」としての*jalousie*は「真の愛」の証拠ではないと考えている。

「その妻に*jalous*である男は軽蔑される。というのは、それは、彼が彼女を正しいしかたで愛していない証拠だからであり、彼自身と彼女について悪く思っている証拠だからである。彼が彼女を正しいしかたで愛していない、と私が言うのは、もし彼が彼女に対する真の愛(*une vraie amour*)を持っていたならば、彼女に不信をいだくという気持ちにならなかつたはずだからである。彼が愛しているのは本当は彼女ではなくて、彼女を独占することのうちにある(と彼が想像している)幸福を愛しているのにすぎないのである」(『情念論』一六九)。

(ix) それでは「真の愛」とは何か、と私たちはデカルトに聞いてみたくなるだろう。

ところが、なぜか、『情念論』では、それは必ずしも十分に説明されてはいない、と思われる。

「真の愛」にせよ、「永遠の愛」にせよ、現代人はもうあまり正面から語るうとはしない論題であるが、中世では、きわめて根本的な、重要な問題として、熱心に語られる主要なテーマであった。

(x) ちなみに、デカルトの次の命題にもきわめて興味深いところがある。

「愛は必ず喜びをとまなう」(『情念論』一三九)。

「憎しみは必ず悲しみをともなう」(『情念論』一四〇)。

ここでは、デカルトは、彼自身の言葉で、十分に、なぜそうなのかを説明してくれているが、その裏には、スコラ哲学の情念論が在ると容易に推測される。

たとえば、『神学大全』第二―二部第三四問題第三項では、「隣人へのあらゆる憎しみは罪であるか否か」が問われ、その主文では、「私たちは私たちの兄弟の本性(natura)や恩寵そのものを罪なしには憎むことができない」とされているのである。

### 第三章 近代から中世へ

(i) さて、それでは、トマス・アクィナスの『神学大全』における情念論ではどうであろうか。

右で言及したように、「ねたみと結びついた熱望」zelus invidiaeが「嫉妬」に当たる(第二―一部第二八問題第四項主文)と考えられる。

それは、ファレルの場合と同様、男女関係の場面でも発生する(cf:sexual jealousy)し、また優劣関係の場面でも発生する(cf:professional jealousy)とわらう。

「ねたみ」invidiaとは、他者の持つ大きな善 bonum ――ここでの「善」とは、広い意味で用いられていて、具体的には、幸

福や財産、名誉や社会的な地位などを含む——と、自己の持つ小さな善とを比較検討した際に生じる、憎しみを交えた悲しみである（第二一二部第三六問題第一項主文）。

「ねたみ」はトマスによれば、「主要な悪徳、根源的な悪徳」であり（第二一二部第三六問題第四項主文）、「大きな罪」である（第二一二部第三六問題第三項主文）。

思えば、私たち人間は、中世においても、また近現代においても、自己と他者、自己の持つ善と他者の持つ善とを、つねに、比較しながら生きているのである。

自己の持つ善は他者の持つ善より大きいこともあるし、小さいこともある。

また、他者の持つ小さな金銭的な善が、宝くじに当たったなどにより、急に大きくなることもあるし、他者の持つ大きな身体的な善が、交通事故にあつたなどにより、急に小さくなることもある。

ところで、私たち人間は、トマスによると、全員、神の被造物であるので、本来、善きものとして造られている。

それゆえ、人間本性に照らすと、私たち人間は、本来、金銭的であれ、また身体的であれ、自己の持つ善よりも大きな善を持つに至つた他者を誉め讃え、「ご同慶の至り」と祝福することができるはずである。

また、同様に、私たち人間は、本来、自己の持つ善よりも小さな善を持つに至つた他者をいたわり、なぐさめて、憐れみをおけることができるはずである。

ところが、実際には、私たち人間が、自己の持つ善よりも大きな善を持つに至つた他者を、心中ひそかに、憎んで、悲しむとしたら、また、同様に、自己の持つ善よりも小さな善を持つに至つた他者の物語を週刊誌などの中に探し求めて、目につくと、大いに喜び、熱心に愛読するとしたら、それは何という人間本性の倒錯 (Descartes: op. cit. 182, *perverse de nature*) であろうか。

それとも、それこそ「人間の本性」 *hominum natura* (Spinoza: *Ethica* III, 32, *schol.*) *ひまふじんびん* と言いたらうか。

トマスが「ねたみ」をして、「主要な悪徳、根源的な悪徳」であり、「大きな罪」であると言うのは、まことにもっともである。

ここで、訳語の混乱について一言する。

「ねたみ」にしても、また「嫉妬」にしても、近代の哲学研究者の間、また中世の哲学研究者の間でも、遺憾ながら、いささか訳語の混乱が認められる。

envy や envie、それに invidia は、本来、「ねたみ」と訳したほうが良いと思うが、それは、多くの訳者により、実際には、「羨望」と訳されたり、「羨み」と訳されたり、「嫉妬」とまで訳されたりしている。

もしも、envy や envie、それに invidia を「嫉妬」と訳すと、「ねたみ」と「嫉妬」との本質的な関係がわからなくなるであらう。

(ii) トマスは「愛」を「欲望の愛」*amor concupiscentiae* と「友愛の愛」*amor amicitiae* とに二分している。

そして、「ねたみと結びついた熱望」*zelus invidiae* は「欲望の愛」から生じると考えている。

ここで、デカルトが、「真の愛」に言及しつつ、「嫉妬」としての *jalousie* はとがめられるべきである、と述べている箇所が思い起こされる。

ただし、デカルト自身は「好意の愛」*amour de bienveillance* と「欲望の愛」*amour de concupiscentie* という、伝統的なスコラ哲学における愛の区別を、本質的な区別ではないとして、否定している（『情念論』八一）ことを忘れてはならない。

確かに、引き続き『情念論』八二において、デカルトは、具体的に、野心家の愛、守銭奴の愛、酒飲みの愛、獣欲に駆られたものの愛、高貴な人の愛、善き父の愛は愛を分有する (*participent*) ということにおいては同じであるとまで言っている。

けれども、そこには、いかなる愛の区別もないのかと言うと、そうでもないのであって、デカルトははじめの四人とあ

の二人とを区別しているところもある。すなわち「はじめの四人は彼らの情念のおもむく対象の所有に対する愛だけを持つのであって、対象それ自身に対する愛を持たない」。

この点がきわめて重要なので、ひとまず、トマスの愛の区別を稲垣先生の説明により、確認しておこう。

「情念としての愛とは、何らかの好ましいもの、善いもの、美しいものによって呼びさまされるところの愛であるが、それら好ましいもの、善いものがわれわれの欲望（必要、欠乏）を満たしてくれるようなものである場合には、その愛は欲望の愛と呼ばれる。これにたいして、それら善いもの、美しいものがそれ自身において善く、美しいものであるかぎりにおいてわれわれを引きつけるならば、その愛は友愛の愛と名付けられる」（稲垣良典『人間の探究』名古屋大学出版会、一九八八年）。

(iii) 「欲望の愛」については、「私は酒を愛する」との場面で、私は、かつて、稲垣先生と議論したことがある。

以下に、私の分析を再言するが、その際、「自己愛」と「他者愛」という平凡な区別を導入する。

「私は酒を愛する」とはどのような意味であろうか。

それは、一見、「私」が「私」以外のもの、すなわち「酒」を愛する、他者愛の一例であるように見える。

ところが、以下のように、この命題はしだいに書き換えられていく。

- (1) 私は酒を愛する。
- (2) 私は酒を飲むことを愛する。
- (3) 私は酒を飲むことによって得られる喜びを愛する。
- (4) 私は酒を飲むことによって得られる私の喜びを愛する。
- (5) 私は私を愛する。

(1)は、文字通りにその意味を受け取れば、他者愛の一例であるかのような様相を呈しているが、その実は、ほとんど書き換えられていて、なんのことはない、ついには、(5)へと、すなわち、平々凡々たる自己愛へとたどり着くのである。

この場合、他者愛は、「私は酒を愛する」という形をとって、「私が物を愛する」場面で、書き換えが進んだからまだ良いのである。

もしも、他者愛が、「私はあなたを愛する」という形をとって、「私が人を愛する」場面で、書き換えが進んだとしたら、どうであろうか。

以下に、書き換えの事例を示してみよう。

もしも「酒」のところに「あなたの財産」または「あなたの体」「あなたの顔」を代入すると、どうなるだろう。すると、この世の中では、真の他者愛は、現実には、稀有であることがしだいに覚えてくることだろう。

たとえば、以下のようにして。

- (1) 私はあなたを愛する。
- (2) 私はあなたの体を愛する。
- (3) 私はあなたの体から得られる快樂を愛する。
- (4) 私はあなたの体から得られる私の快樂を愛する。
- (5) 私は私を愛する。

多くの他者愛は、このようにして、実際には、自己愛の仮装に過ぎず、派手な他者愛の装いの下には、往々にして、ひそかに自己愛が隠れていることに注意しなければならない。もしも無自覚的に仮装している場合は、みずからもまた欺かれて



いることになり、それは仮装する自己愛とも言えるが、もしも自覚的に仮装している場合は、それは偽装する自己愛であると言える。この世の中では、仮装する自己愛や、偽装する自己愛が横行し、氾濫しているとも言える。この場合、被害者は「私」と「他者」である場合もあるし、また「他者」のみである場合もある。

(iv) ところで、他者愛「私はあなたを愛する」と自己愛「私は私を愛する」とは両立しないのであろうか。

どちらかというところ、中世では、自己否定的な他者愛や自己犠牲的な他者愛が強調される場合が多かったと思うが、そのような潮流の中でありながら、トマスは自己愛を肯定した哲学者として知られている。

「人がそれによって自己を愛する愛 (amor) は友愛の形相 (forma) であり、根元 (radix) である」(第二二部第二五問題第四項)。

自己中心的な自己愛は、けっして、他者愛と両立することはないが、真の自己愛は真の他者愛と両立するとトマスは考えていたと思う。

では真の他者愛とは何か。

(v) 愛について、トマスは現代人に大いに教えてくれる。

私たち現代人は、知らず知らずのうちに、相对主義の世界観の中で生きているので、どこまでも、愛と憎しみを同一平面上でとらえて、愛の反対情念は憎しみであり、憎しみの反対情念は愛である、とのみ言い表している。

ところが、トマスは、けっして、そうではないのである。

トマスは愛の絶対性や根源性を確信して、そこから、他のすべての情念を物語るのである。

たとえば、以下のようにして。

愛以外の情念で、愛を前提しないものは一つもない(第二二部第二七問題第四項主文)。

愛は憎しみに先立つ（第二一部第二九問題第二項主文）。

すべての憎しみは愛を原因として生まれてくる。それゆえ、憎しみが愛よりも強力であることは不可能である（第二一部第二九問題第三項主文）。

トマスはあまりにも単純明快に愛の真実を語っているので、かえって、複雑に錯綜する状況に翻弄されつつ生きる現代人には伝わりにくいかもしれない。

そこで、デカルトの「真の愛」についての言葉を再引用した上で、その言葉に引きつけて現代人向けに応用して語りなおしてみよう。

すなわち、デカルトは、『情念論』一六九で、「嫉妬」としての *jalousie* は「真の愛」の証拠ではないと考えている。

「その妻に *jalous* である男は軽蔑される。というのは、それは、彼が彼女を正しいしかたで愛していない証拠だからであり、彼自身と彼女について悪く思っている証拠だからである。彼が彼女を正しいしかたで愛していない、と私が言うのは、もし彼が彼女に対する真の愛 (*une vraie amour*) を持っていたならば、彼女に不信をいだくという気持ちになどならなかったはずだからである。彼が愛しているのは本当は彼女ではなくて、彼女を独占することのうちにある（と彼が想像している）幸福を愛しているのにすぎないのである」。

(vi) 「真の自己愛」に照らすと、次のように言える。

もしも彼が彼自身を本当に愛しているとしたら、彼は、日々、彼自身の真の幸福を追い求めているのにちがいない。

他方、「真の他者愛」に照らすと、次のように言える。

もしも彼が彼女を本当に愛しているとしたら、彼は、日々、彼女の真の幸福を追い求めているのにちがいない。

「自己愛」に照らすと、それが「真の自己愛」であるのか、それともただ単に「自己中心的な自己愛」にすぎないのかの間

には、まさに、天地の開きがある。

もしも彼が「自己中心的な自己愛」により自己を愛しているとしたり、すべての「他者愛」は、「自己愛」を実現するための手段であり、道具であるのにすぎないことになる。

他方、もしも彼が「真の自己愛」により自己を愛しているとしたり、彼は、日々、彼自身の真の幸福を追い求めているだけではなく、同時にまた、「真の他者愛」により彼女の真の幸福をも追い求めているのにちがいない。

「彼の幸福」と「彼女の幸福」とが一致するとき、彼の「自己愛」と彼の「他者愛」とは調和して成立し、「二人の幸福」は実現するのである。

けれども、「彼の幸福」と「彼女の幸福」とが一致しないときにも、彼が罪を犯したわけではなく、ましてや彼女が罪を犯したわけでもない。

彼が、彼の「自己愛」により、日々、彼自身の幸福を追い求める権利と自由を有しているのと同様、彼女もまた、彼女の「自己愛」により、日々、彼女自身の幸福を追い求める権利と自由を有しているのである。

このあたりの真理の洞察に欠けると、最悪の場合、ストーカー殺人事件が起きる。

(東京学芸大学・教授)